

第10回 室町幕府の成立

1. 鎌倉幕府の滅亡

承久の乱後、幕府は皇位継承に介入するようになった。これに関係して朝廷内部では皇位継承をめぐる対立が生じた。対立のきっかけは、後嵯峨上皇が長男の後深草天皇の後に次男の亀山天皇を立て、亀山天皇の子孫に皇位継承をさせようとしたことによる。後嵯峨上皇の死後、後深草と亀山の対立が激しくなり、幕府が皇位継承に介入し、亀山上皇が後宇多天皇の後に、後深草上皇の皇子伏見天皇の即位を認めた結果、皇統は2つに分裂してしまった。両者の対立は、皇室が持つ荘園の相続問題も絡んでいた。すなわち、**後深草＝持明院統＝長講堂領**に対し、**亀山＝大覚寺統＝八条院領**の対立が起きた。この混乱に介入した幕府は、1308年、まず両統が交互に皇位に就くように指示した（これを**迭立の議**という）。しかし、その後も対立は続き、1317年には、今後幕府は皇位継承に介入せず、両統の話し合いで皇位継承を決めることにした（これを**文保の和談**という）。

このような状況のもとで、1318年、大覚寺統の後醍醐天皇が即位した。天皇は、後宇多天皇が1321年に院政を中止して以降、天皇親政を実施し、北畠親房、日野資朝、日野俊基らを集め、**記録所**を設置し、政治をはじめた。

一方、幕府では政治の混乱が起きていた。得宗の北条高時は、田楽・鬨犬にあけくれ、内管領の長崎高資が、政治の実権を握り、賄賂を貪り、御内人の横暴はその頂点に達していた。御内人の政治独占とそれに反発する御家人との対立は激しくなり、これに加えて各地で悪党たちの活動が活発化していった。

こうした混乱を利用し、幕府打倒の計画が後醍醐天皇らにより立てられた。まず、1324年、日野資朝、俊基を中心に土岐頼兼らが加わり、計画が立てられた。しかし、この計画は幕府が事前に知るところとなり、日野資朝は佐渡に配流され、計画は失敗に終わった（これを**正中の変**という）。だが、天皇はこの失敗に屈せず、次の計画を立てた。皇子の護良親王を天台座主として延暦寺に入れ、有力な寺院を味方につけようとしたのである。だが、この計画も天皇側近の貴族の動揺から、吉田定房が幕府に密告したため、天皇は1331年、一旦笠置に逃れたが、捕らえられ、隠岐に配流された（これを**元弘の変**という）。

2度にわたる倒幕計画の失敗は、何をもたらしたか。混乱はかえって激しくなり、全体の流れは、幕府打倒の方向へ傾いていった。北条氏側は、後醍醐天皇の配流後、持明院統の光厳天皇を即位させ、事態の收拾を図ったが、吉野に逃れた護良親王は、各地の武士たちに決起を促し、幕府の御家人や河内の楠木正成らが蜂起した。隠岐に流された後醍醐天皇も伯耆国の豪族名和長年に迎えられ、船上山で挙兵した。幕府は大軍を送りこれを押さえようとしたが、逆に足利高氏が幕府にそむいて挙兵し、近江国の番場峠で六波羅探題の北条仲時を自殺させた。関東でも、新田義貞が鎌倉を攻め、北条高時ら北条氏一門が滅亡した。こうして1333年、鎌倉幕府は滅亡した。

2. 建武の新政

京都に戻った後醍醐天皇は、光厳天皇を廃位させ、正慶の年号も廃止させた。また、この戦乱で奪われた所領を元の所有者に返すという旧領回復令を出し、訴訟などの裁判はすべて天皇の意思に基づく綸旨によるべきこととした。そして、政治機関として記録所が復活され、恩賞方が新設された。しかし、これらの措置は、知行年紀法をはじめとする武士の慣習を無視したばかりでなく、武士たちの不満を招き、所領の不安を抱いた武士、さらには名主・農民までが次々に京都に入り混乱が生じた。これを抑えるため天皇は、没収する所領は北条高時一族のものに限ること、また、現在所領を支配している者の権利を認める諸国平均安堵法を発し、加えて雑訴決断所を新設した。

一方、地方政治についても知行国を没収し、新しく国司を任命し、これに地頭を指揮・命令をさせた。これに対し、国司と並置された守護には、武力の行使を必要とする警察権が与えられただけで、その比重は著しく低下した。また、奥州には北畠顕家が、天皇の息子義良親王を奉じて陸奥将軍府を作り、足利尊氏の弟直義は、成良親王を奉じて鎌倉将軍府を作った。尊氏は、武蔵の守護・国司を兼任し、鎮守府将軍に就任しただけであった。これらの措置は、すべて1333年のことであり、ここでようやく新政府ができた。

◆ まとめ

- ①延喜・天曆の治にかえれ一天皇独裁体制を樹立しようとするものだった。
- ②建武政権を支える独自の軍事力は武者所以外には確認できない。
- ③後醍醐は、貨幣制度などの経済政策を持っていたが、ほとんど成功していない。
- ④後醍醐は、国司の権限を強化し、中央集権的な地方政治を実施しようとしたが、現実には守護と国司の並置を認めざるを得なかった。
- ⑤所領の領有権を綸旨で再確認した。

(ここで、短い感想。教科書や資料集などに掲載されている後醍醐天皇の肖像を見て欲しい。どう見ても異常、本当は、「異形」というが、ともかく変！僧の姿をし、両手に密教の法具を持って、鬚まで伸ばしている。討幕の決意を示しているというのだが、ある種、あっちの世界に行ってるよね。こんな風に利用され、信仰された密教って可哀想というか、そういうものじゃないはずなのに…。と思うのは、私だけかも知れないが。ともかく、後醍醐天皇って、武士の時代に天皇独裁やろうって考えた状況が見抜けない人のイメージが強い。)

3. 新政の混乱

1334年、天皇は年号を建武と改め、大内裏造営、貨幣鑄造などの政策を実行しはじめる。この間、天皇の寵愛する姫廉子や祈祷僧文観など天皇とつながる人々が奢りを極める。しかし、その反面これらの政策は武士たちの不満を一層高め、貴族たちの中からも不満が生

じてきた。その一端は、「二条河原の落首」に見られるとおりである。混乱の原因は、①恩賞の不公平さ、つまり公家に有利であったこと。②従来の知行年紀法が無視され、天皇の綸旨が重視されたこと。③土地訴訟の増加による政務の停滞。④承久の乱で焼失した大内裏造営計画とそれに伴う地頭への課税。こうした不満が高まり、新政に対して人心が離れていった。さらに、新政内部で対立が生じた。すでに1333年、征夷大將軍の地位をめぐり護良親王と足利尊氏との対立がおこった。天皇は一応護良を將軍にしたが、旧幕府に仕えた武士たちの不満を背景とする尊氏の力も無視できず、恩賞を与えて重んじなければならなかった。だが、護良と尊氏との対立は激化するばかりだった。1334年、護良が尊氏打倒を企て、ついに天皇も護良を流罪にしなくてはならなくなった。また、この年は、九州・紀伊・奥州・越後などで北条氏の残党が反乱を起こし、それが1335年の北条時行（高時の子）の反乱（中先代の乱）につながる。鎌倉にいた尊氏の弟直義は尊氏に協力を求め、尊氏は鎌倉に出向いた。

4. 尊氏の反乱

北条時行を倒した尊氏・直義兄弟は、新政に反旗を翻し、天皇と対立する。彼らは新田義貞を箱根竹ノ下で迎え撃ち、義貞の軍を追って1336年入洛するが、奥州から来た北畠顯家の軍などに圧迫され、一旦京都から追放され、九州に下る。この間、尊氏は光厳上皇の院宣を受け、天皇に没収された武士の所領を元に戻すことを約束して武士を集めた。九州で体制を整えた尊氏は、陸路・海路の二手に分かれて京都に向かった。途中、摂津湊川で楠木正成を倒し、義貞の軍を破り再度上京した。

5. 建武式目

入京した尊氏は、持明院統の光明天皇を擁立し、新政権を確立していった。一方、後醍醐側は、皇太子の恒良親王と新田義貞を北陸に移した上で、一端尊氏に降伏した。しかし、機会を見て京都を脱出し、吉野に入った。後醍醐が吉野を拠点に選んだのは、①地形的北の奈良に強い。②修験道の本拠地である吉野で山伏を使い情報を集めることができる考えた。③吉野川を通じ紀伊熊野の水軍と結びついた、という理由をあげることができる。

尊氏側は、二階堂是円ら明法家らに1336年、施政の要綱を諮問し、**建武式目**を答申させた。この式目は、貞永式目とは異なり、あくまでも施政方針であり、裁判などは従来の貞永式目が利用された。室町幕府の基本方針は、この式目に記されていることから、この年に室町幕府が成立したと考えることができる。

1338年、尊氏は征夷大將軍に就任し、政治をはじめた。尊氏は弟直義にも全国の政務を統括する権限を与え、自らは武家の棟梁として侍所・恩賞方などを把握し、あわせて所領の給与権などを掌握する政治の方向を取った。つまり、発足したばかりの幕府は、尊氏・

直義兄弟の二頭政治であった。

6. 南北朝の内乱

南朝は、後醍醐天皇の皇子を各地に派遣して抵抗を強めた。しかし、幕府は北畠顕家を和泉石津で敗死させ、ついで新田義貞を越前藤島で戦死させた。翌年、後醍醐が死亡し、南朝は常陸の北畠親房、畿内の楠木正行^{まきつら}、九州の懐良親王だけとなった。北畠親房は、南朝の正当性を主張する『神皇正統記』を著わし、関東・東北地方の武士に呼びかけ抵抗を試みるが、幕府軍に圧倒され、吉野に戻った。楠木正行は、1348年に四条畷の戦いで敗死し、九州の懐良親王だけが征西将軍として菊池氏を味方につけて勢力を保っていたが、足利義満が派遣した今川了俊によって打倒された。南朝は、後醍醐天皇の後、後村上天皇が即位するが、劣勢は挽回できず、吉野を捨て賀名生^{あきのう}に移らなければならなかった。

北朝は次第に勢力を拡大したが、先に述べた二頭政治が原因して対立が生じた。それは、尊氏の執事高師直と直義との対立として表面化する。この頃、畿内の悪党と言われた武士たちは、将軍の直属になる者たちが大勢いた。師直はその代表的人物で、寺社・本所などの権威を踏みにじっても平然としていられる性格の持ち主だった。これに対し直義は、執権政治のような正統な武士政治を理想とする人物であり、そこに両者の対立が起きた原因があった。この対立は、1349年直義が師直を執事の座から追放したことに対し、師直が武力で直義を追い詰め、直義を引退させる事件となった。その後、幕府内では直義・尊氏がそれぞれの状況の変化に伴って南朝に和睦を申し入れたことで幕政は混乱する。こうした混乱の背景には、国人とよばれる各地の武士たちの活発な動きがあった。また、国人だけでなく、惣とよばれる自治的な村を形成しつつあった農民たちの動きや商工業者たちの動きがあったことも忘れてはならない。この内乱の意義は、今述べたような新興武士集団や惣村などの形成、商人らをはじめとする庶民の台頭が活発化したことにある。

この内乱をおさめたのが3代将軍足利義満である。義満は、1392年、南朝との和平交渉を進め、後亀山天皇が譲位する形で、神器を北朝の後小松天皇に渡すこと、今後両統迭立することを条件に南北朝の合一をはかったが、条件は守られず、南朝を吸収することとなった。

7. 足利義満

1368年、足利義満が3代将軍に就任する。当初は細川頼之が管領として義満を補佐していた。義満は、1378年には京都北小路室町^{むろまち}に新邸宅を建てた。この庭園に多くの花を植えたことから「花の御所」とよばれる。尊氏・義詮^{よしあきら}二代の将軍の時代は、二条高倉に拠点があったが、これを移したのである。義満はすでに見たように、1392年南北朝を統一し、朝廷をもその支配下に置くようになる。1394年に義満は将軍職を子の義持に譲り、太政大臣

になった。翌年には太政大臣を辞し、法皇に準じた扱いを受けるようになる。義満は、公武の権威を一身に集め、鹿苑院金閣を拠点に天皇を超越した存在として政治を行おうとしていたようである。なお、義満は 1408 年に死去した。

◆義満は事実上の上皇として院宣に代わる公文書（伝奏奉書）を発給している。

8. 室町幕府の政治機構

足利義満の時に完成したとされる室町幕府の機構は、当初の幕府とは異なる機構が整備されたようである、当初の執事は管領とよばれるようになり、裁判機関（引付）を掌握して将軍に仕えた。管領には足利氏一門の細川・斯波・畠山が交代で就任することから**三管領**とよばれる。管領と共に力を持っていたのは、京都の警備。裁判権を持ち、山城国の守護を兼任した侍所の長官（所司）がいた。一色・山名・赤松・京極が交代したことから**四職**というが、実際には土岐氏が加わり、**五職**というべきであろう。

政所は、財務管理を行う。長官である執事には、伊勢氏が就任した。政所に属する倉奉行には銭納方一衆が所属し、財政を担当したが、その多くは延暦寺の支配下の土倉であった。また、公文書を保管する問注所もあった。さらに、将軍に直属する軍を奉公衆（御馬廻り）という。将軍を警護すると同時に直轄地である御料所を管理した。

地方には重要地に各機関が設置された。幕府の拠点が畿内に移ったために手薄になった関東の支配のために鎌倉府が置かれた。長官は鎌倉公方とよばれ、尊氏の子足利基氏とその子孫が世襲した。鎌倉公方の補佐を関東管領といい、上杉氏が世襲した。支配地域は関東 8 カ国と伊豆・甲斐の 10 カ国であった。鎌倉府は、鎌倉時代の六波羅探題に匹敵する機関である。この他に九州・奥州・羽州（出羽の統治）にもそれぞれ探題が置かれた。

財政は幕府の直轄領で御料所がある。しかし、鎌倉時代に比べ、その所領はそれほど多くはなかった。次に庶民への課税がある。段銭は田畑の段別に応じ、賦課するもので、守護が徴収した。棟別銭は、家屋に対する税。倉役・酒屋役は、この時代の高利貸業者に課税した。抽分銭は日明貿易を行う大名・商人に課した。これ以外に、交通税として関銭・津料があった。

9. 幕府支配の弱点

財政からも理解できるように、幕府の財源は都市に依存しており、生産の主たる場所である農村には勢力が及んでいない。また、将軍に属する管領や侍所の所司たちは有力な守護であり、一步誤ると幕府は諸勢力の対立の場となる危険性をはらんでいた。義満が公家風の故実を取り入れ、三管・四職といった家格の秩序を定め、後には明の権威まで借りたのは、この危険を克服するためのことであった。

◆畿内の要国には鎌倉時代に引き続き守護が置かれず、大和国は興福寺の一国支配が認め

られた。



その後、奥羽二国と大和を除く 60 余国には守護が置かれたが、幕府の拠点である山城は当初守護が置かれず、検断は侍所の管轄とし、使節遵行は山城国内の御家人 2 人を使節に命じてこれに当たさせた。観応の擾乱後、山城の支配は侍所が担当することとなり、侍所頭人が事実上の山城国の守護となった。

10. 守護大名

南北朝の内乱の中で地方武士は勢力を強め、国人とよばれるようになった。彼らは農民を支配し、守護に対抗するため国人一揆という在地領主の連合を形成していった。

幕府は、国人の一部を先に述べた奉公衆として組織し、守護に足利氏一門を登用し、地方支配を強めようとした。だが逆に守護は内乱を通じて勢力を強めていった。というのは、幕府が地方支配を広げることに協力する最大の勢力が守護だったため、幕府も守護の権限拡大を承認したからである。

内乱の中で国人一揆を中心とする地方武士の反乱増加に対処し、国人たちを統制するため、足利尊氏は 1346 年、従来の大犯三カ条に加え、刈田狼藉（暴力的に他人の田地の作物を刈り取る行為）の禁止（逮捕）と使節遵行権（幕府が下した判決を執行する権利）を守護に認めた。さらに、守護は、幕府の段銭を徴収する権利を利用し、段銭をかけるようになった。

1352 年、南朝の勢力が一時強まったことに対し、尊氏は観応の半済令を出し、対処した。これをいわゆる半済令というが、その後 1368 年、3 代義満の時にも半済令を出しており、こちらを応安の半済令とよび区別している。両者の相違は、観応令が近江・美濃・尾張 3 カ国に限り、1 年間荘園・公領の年貢の半分を軍事費（兵糧米）として徴収することを認めたものである。だが、この規定は無視され、全国に拡大し、1 年限りという決まりも恒常的なものとなってしまった。そこで、応安令は、形効化した規定を廃止し、全国の守護に半済を認めたものである。応安令の出された背景には、天皇・摂関家・寺社の荘園に半済を認め、支配体制を整える目的もあった。

さらに、守護請も実施されるようになった。内乱を通じて荘園領主に年貢が納められなくなったから、守護が年貢徴収を請け負うことになったのである。守護請は、鎌倉時代の地頭請と同様のものであるが、この時期、地頭の大半が守護の家臣となったため、守護が年貢徴収をすることになったのである。

権限が拡大した守護は、国人を次第に圧倒し、彼らを家臣として組織するようになった。国人たちも守護の力を利用して土地の支配をうまく行おうとするようになった。そこで、守護は国人を守護代に任命し、任国の支配を任せるようになっていった。こうして守護は、荘園・公領を侵略しつつ、国人らを家臣団として編成し、国衙の機能を吸収して地位的な

封建権力を持つようになる。このような守護を鎌倉時代の守護に対して**守護大名**といい、守護大名が支配する領域や地方支配を**守護領国制**という。

◆守護の職権

鎌倉幕府成立当初—大犯三カ条＝（A）

貞永式目發布直後—（A）＋夜盗・強盗・山賊＝（B）

弘安の役後—（A）＋（B）＋在地武士統率権＝（C）

鎌倉末—（A）＋（B）＋（C）＋宿駅・街道の維持など

使節遵行—幕府の裁判権を守護が担当

半済—本年貢の半分を守護の支配下に置く権利で、軍事費調達の一手段として創出された
徴税権—大田文・凶田帳などの台帳記載の田地に税率を乗じ、家屋の棟数に応じて賦課したもので、段銭・棟別銭とよばれた。

守護は、幕府権力が相対的に安定し、守護自身が行政官になってくると、守護家の当主は京都に常駐するように命じられた。

11. 守護大名と幕府の対立

幕府は有力守護大名の協力を得なければ、政権を維持できず、守護大名も將軍の権威を利用して領国支配を行うという微妙なバランスができあがっていた。しかし、このバランスが崩れると対立が生じることは必至であった。

足利義満は、將軍の権威を高めるため、守護同士の対立や内紛を利用して守護の力を削減しようとした。1390年、美濃・尾張・伊勢の3カ国の守護土岐康行を倒し、1391年には、山陰地方で11カ国の守護を兼任し、「六分の一殿」とよばれた山名氏清を滅ぼした。**明徳の乱**である。さらに、1399年には、大内義弘を領国の堺で滅ぼす**応永の乱**を起こした。

4代足利義持の時代は、一応安定期とされるが、父の外交政策に不満を持ち、これを転換させ、義満が寵愛した弟の義嗣よしつぐと対立した。この対立にからんで守護大名の間にも対立が生じた。また、1416年、鎌倉公方足利持氏に不満を持った関東管領上杉氏憲（禅秀）が鎌倉で反乱を起こした。**上杉禅秀の乱**である。義持は後に出家し、將軍は義量よしかずが継いだが、義量は若死にしまい、義持自身も將軍継嗣者（後継者）を決定しないまま死亡した。

足利持氏は、この時將軍になる希望を持ったが、有力守護大名たちは、籤引きで義満の子で天台座主青蓮院義円を選んだ。義円は還俗し、6代將軍**義教**となる。

義教は有力守護大名の勢力を削減し、守護大名の相続争いに介入するなど強圧的な手段を取り、「万人恐怖」とよばれる政治を行った。こうした中で持氏との対立は決定的になり、1438年、幕府は持氏に対し、軍を派遣し、翌年持氏を殺害した。**永享の乱**である。ついで、持氏の子を助けた結城氏朝が反乱を起こしたが、1440年打倒した（**結城合戦**）。

守護大名の中では義教に対する反感が強まるばかりであった。義教に疎んじられた赤松満祐は、守護職を奪われ、一族の赤松貞村に守護職を与えるという噂を聞き、1441年、結

城合戦勝利の祝宴に事寄せて自邸に義教を招き、義教を殺害した（**嘉吉の乱**）。幕府は、山名持豊（宗全）を送り、ようやく赤松満祐を倒すことができた。この事件以後、幕府の権威は地に落ち、幕府の力は弱まっていった。

（このあたりの幕府と有力守護大名との対立は、ややこしい。簡単に言えば、幕府と守護大名は持ちつ持たれつの関係であり、両者は相手を完全に否定し去ることはできないにもかかわらず、お互いに勢力拡大を狙って対立したのだが、わずかな期間に何度も対立が起きているので、入試では、出題されやすい。できれば、きちんと整理したノートを作って、対立関係を間違えないようにしておこう）。

12. 室町時代の外交

（一定程度、世界史的な説明がなされているだろうし、生徒の方でも、ある程度は理解していると思うのだが、日本史という科目で教え、学ぶと、どうしてか、ある日突然、中国が、朝鮮が変化しました。ということとなるのだろう。背景のダイナミズムが全く断ち切られた状態で、中国では、この時に〇〇が出て、〇〇という王朝＝国ができ、朝鮮でも同様に〇〇が誕生し、そして日本とこんな風に交流しました。「ちゃんちゃん」。という説明しかできないのだろうか。だから、世界史が必修になっているのではないかと教師は言う。さらに、「**時間がない！**」と痛切な叫びを発せざるを得ない。確かにそうだ。私も予備校で教えていた時、同じことを考え、言っていた。しかも、入試と直結する予備校では、いかに点数を稼がせるか、という問題も加わり、ジレンマに陥っていたことは事実であり、それで、思考停止の上で、ノルマのように教えていた。

しかし、日本史と世界史の接点という視点を導入した授業は、必要である。当たり前のこととわかっていても、これが不可能になってしまっている。教師によっては、この問題を少しでも解決しようと取り組んでいる方もおられるだろう。そうした教師から教えられた生徒は幸せである。まわり道になるかも知れないが、以下は、私自身のにわか勉強のメモである。）

◆世界史の視点から（1）

世界では、人・モノの動きは、「大航海時代」に入る以前からはじまっていた。具体的には、①**草原の道**（ステップルート）、②**オアシスの道**（シルクロードが含まれる）、③**海の道**（マリンルート）の3つを利用していることである。①は、騎馬民族の移動・交流・交易である。②は、中央アジアの乾燥地帯にあるオアシスを結ぶルートであり、東西交流にとって重要な役割を果たしている。

③は、地中海～紅海～ペルシア湾～アラビア海を渡り、インド～東南アジア～中国までを結ぶルートである。海が荒れて危険だというリスクはあるが、大量にモノを輸送するためには、マリンルートが最適であった。8世紀以後、アラブ・イランのムスリム商人は、海上に進出していく。また、10世紀になると中国人も海上に進出するようになった。当時、

中国では、農業生産が拡大し、これに促され、流通と手工業生産も盛んになっていった。特に、各地で生産された絹織物、青磁・白磁などの陶磁器は、海の道を利用し、世界各国に運ばれていった。だから、海の道＝マリルート^①を別名「**陶器の道**（セラミックルート）ともよぶ。中国人はこれらの商品を**ジャンク船**で運んだ。

宋を経て、元帝国が誕生するが、元でも海上交易は重視され、元寇はあったが、元との交流が消滅したわけではなかった。

14世紀半ば、今度は逆に日本の側の動きが活発化する。**倭寇**（前期倭寇）の活動である。彼らは、朝鮮半島・中国沿岸での私貿易に加え、食料・人間の略奪を行った。倭寇の活動が活発であった頃、中国では明が、朝鮮では李氏朝鮮が建国され、日本では足利義満により南北朝の内乱が鎮圧された。明の永楽帝は、中国を中心とする秩序ある交易をめざし、海禁と朝貢貿易を進めていく。この大きな動きに足利義満は参画したこととなる。つまり、勘合貿易という形である。

海禁は、いうまでもなく、貿易統制であり、中国からの積極的に貿易に参加しないことを示している。だから、日本の船が日明貿易に積極的に加わることが可能となったのである。さらに、15世紀前半、尚巴志によって**琉球王国**が成立された。海禁政策の継続により中国人の海上進出は依然として停滞しており、その隙間を埋めたのが、琉球船の活躍であった。琉球船は、東南アジアで活発な貿易を行い、交易品を東アジアにもたらず中継貿易を担ったのである。

このような世界史の背景が、室町時代の日本の交易に大きな影響を及ぼしたのである。日本史は、日本史だけで一人歩きしているのではない。

①中国との関係

元寇後、1325年、鎌倉幕府は、建長寺再建のため、建長寺船を派遣した。さらに、足利尊氏は、1341年夢窓疎石の勧めで、後醍醐天皇の菩提を弔うために天龍寺船を派遣した。このように幕府は、当時正式な国交を持たなかったが、中国との私的な交易を続けていた。

ところで、14世紀後半から中国・朝鮮の人々は、**倭寇**を恐れ、その鎮圧を要求するようになった。倭寇とは、壱岐・対馬・肥前松浦半島を拠点にする住民で、船団を組み貿易に従事し、貿易がうまくいかなければ、海賊行為を働く集団のことである。彼らは、米などの食料や人を略奪し、中国・朝鮮の人々に恐れられていた。倭寇の活動が活発だった頃、中国では元が滅亡し、1368年、**朱元璋**が**明**を建国した。日本はちょうど南北朝の内乱期であり、中国側は九州を支配していた懐良親王に何度か倭寇の鎮圧を要求したが聞き入れられなかった。その後、3代将軍義満が国内を統一すると、明は倭寇の鎮圧を改めて要求してきた。明は、中国を中心とする国際秩序の復活をめざそうとするものであったが、義満はこれを受け入れることにした。何故なら、義満は明との交易に伴う莫大な利益に注目し、これを幕府の財源にすることを重視したのであり、その際、明が要求する国際秩序のもとに加わることも辞さなかったというのが定説であるが、最大の狙いは、皇位篡奪を支える

中国からの保障が必要だったと考えるべきだろう。1401年、義満は僧祖阿と博多商人肥富を明に派遣した。

日明貿易の形式はだから、①朝貢形式であること。義満の署名が「日本国王源道義」となっているのは、臣下の礼を尽くしたものである。②また、**勘合**（符）を使用することである。勘合とは、中国がアジア諸国と正式な関係を持つ国々との貿易を行う際に使用した札のことである。日本の場合は、日本という字を2つに分け、「日字勘合」と「本字勘合」とし、これをさらに半分に分けて、一方を勘合、残る一方を勘合底簿とした。日本船が中国に行く場合は「本字勘合」を持参し（だから、大抵教科書には「本字壺号」という勘合の半分が掲載されているのだ）、明で「本字底簿」と照合した。その反対に、中国船が日本に来る場合には「日字勘合」を持って来るようになっていたが、実際には一度も中国船は日本にやって来なかった。勘合船は、寧波で査証を受け、北京で交易した。北京での交易の際、その滞在費は免除され、関税もかからなかったから、その利益は莫大なものだった。1404年～1410年までに6回の船が幕府によって送られた。

しかし、4代将軍義持は義満が死ぬと、この朝貢形式が屈辱的だと嫌い、1411年～32年までの間貿易は中断された。その後1432年、6代将軍義教が貿易を再開した。嘉吉の乱で義教が殺害された後は、守護大名や商人に移っていった。つまり、大内氏と博多商人、細川氏と堺商人（この守護大名と商人との組み合わせは間違えないように。正誤問題で良く組み合わせを変えて出題される）が貿易を担った。両者は、1523年、寧波で大内氏が細川氏の船を焼くという事件を起こし（**寧波の乱**）、その後は大内氏が日明貿易を独占した。1551年、大内氏が滅亡するまでこの状態は変わらなかった。

なお、再開された貿易に加わった人とした中央アジアの人を父とし、はじめ天竺という姓を持ち、後に楠葉西忍とよばれた人物がいたこともつけ加えておく。

この日明貿易での輸出品には銅・硫黄（火薬の原料）・刀剣・漆器・扇などがあり、輸入品には、銅銭（永楽通宝・洪武通宝）・生糸・絹織物・陶磁器などがある。（輸出品・輸入品をチェック。銅を輸出して銅銭を輸入していた。当時日本では明銭が使用されていたから、日本の貨幣と明の貨幣を交換する必要がなかったのである）。

さらにつけ加えると、勘合貿易で使われた船は、船底が平らで船体が扁平な構造のため、大型になるほど大きな波を受けると転覆しやすく、1000石ほどの船が用いられた。日本を出て寧波まで海上を1カ月、陸路入京するので、往復約1年半かかった。

②朝鮮

高麗が滅亡した後、1392年、**李成桂**が李氏朝鮮を建国した。朝鮮にも倭寇が進出し、その被害は大きかった。そこで朝鮮は、1419年倭寇の本拠地とされた対馬を攻撃した（**応永の外寇**）。しかし、事件後、対馬の宗氏と朝鮮との交渉が進み、貿易が行われることになる。1443年には宗氏と朝鮮との間に**癸亥（嘉吉）条約**が結ばれ、1年の貿易船を50隻とすることが決められた。

貿易の形式は、日明貿易と同様、通信符（図書＝銅印）を用いた。貿易港も**富山浦・乃而浦・塩浦**の3つの港（**三浦**）に限り、三浦と首都漢城には倭館が置かれた。三浦に定住した日本人は恒居倭とよばれ、貿易の発展と共にその数は増加した。その後、1510年、恒居倭と朝鮮役人との間に対立が生じ、**三浦の乱**が起きた。1512年壬申約条が結ばれ、事態はようやく安定したが、以後貿易は衰退していった。

日朝貿易での輸出品は銅・硫黄・胡椒・蘇木（赤色の原料）で、胡椒以下の商品は、琉球からもたらされた。輸入品では、**木綿**（綿布、江戸時代に入るまでは輸入品！）・書籍（大蔵経）などであった。

③琉球

琉球は長い間統一政権が生まれなかった。10世紀**按司**とよばれる支配者の下で、村落共同体が作られていた。その後、14世紀半ば、南山・北山・中山の3つの小国家が成立した。そして1429年、中山王**尚巴志**により3国が統一され、**琉球王国**が誕生した。尚氏は、中国の冊報を受け、貿易を盛んに行い、室町幕府にも朝貢した。貿易は、中国・日本・東南アジアの国々との中継貿易で、その拠点であった**那覇**は、この貿易の中心であった。

④蝦夷地

室町時代に入り、蝦夷地と畿内との経済交流がはじまった。この交流のために、もっぱら日本海が利用され、津軽半島の**十三湊**がその窓口とされた。こうして箱館・松前などのアイヌは津軽と往来をはじめ、中世後期になると和人（日本人）は、直接蝦夷地に住むようになった。その中の有力者は、**館主**という領主になる者もいた。

1456年には蝦夷地に進入した商人が利益を独占し、これに加え和人がアイヌの少年を殺害したことから、コシヤマインの反乱が起きた。この乱を鎮圧したのが、花崎館の**蠣崎氏**の客将であった**武田信弘**で、コシヤマインを射殺した。武田信弘は後に**蠣崎氏**を継承する。